

## 竹内 利美

佐々木徹郎（東北大学名誉教授）

昭和47（1972）年3月、東北大学退官の際に作成された竹内利美先生の著作目録に、主著『家族慣行と家制度』ほか単著11、共編著12、論文160のタイトルが記載されている。このほか、先生は『日本庶民生活史料集成』等民俗学関係の事典を編集し、また100項目以上を寄稿している。研究分野は、日本の農村・山村・漁村を対象に、その生産・家族・協同組織など、生活全般にわたる社会学的・歴史学的・民俗学的研究である。おそらくわが国の村の研究で、先生ほどの業績をあげた社会学者は少ないのではないかと思う。

先生は、郷里長野県の小学校教師時代「柳田民俗学」にひかれた。仲間の教師たちと、地元の古老を訪ねまわって聴取調査に終始し、同人誌『蔭の原』を創刊し、それに発表した。しかし面接調査だけのやり方に不満を持ち、文献記録資料の重要性を認めるようになった。当時の成果を『社会経済史学』等に発表した。先生は31歳で教員を辞め上京し、同郷の有賀喜左衛門の紹介で渋沢敬三のアチックミュージアムに寄寓して、ミュージアムの仕事を手伝いながら國學院大學国史学科で勉学した。この間、『小学生の調べた上伊那川島村郷土誌』がミュージアムの叢書として出版された。大学卒業後、中央水産業会に就職した。終戦後は連合軍総司令部民間情報局の顧問として、漁村・農村・山村などの調査に従事した。

昭和26（1951）年、上述の子どもの調べた郷土誌が契機となり、「社会科教育論」の講師として東北大学教育学部に赴任した。当時私は教育社会学講座の講師であったが、同じ社会学者として、研究室をともにした。その後、田辺寿利先生が教育社会学講座の教授として赴任し、竹内先生は社会教育学教授となり、この2つの講座で社会専攻を組織した。専攻では先生の指導の下、東北の僻地、牡鹿半島の漁村、鮎川町の捕鯨、岩手県越喜

来湾の大型定置網、下北半島の村々、蔵王山麓の水没する村の民俗、北上川の沿岸の村々、東北各地の農村の社会変動などの調査を行った。私はその多くの調査に参加した。調査は住民に面接して聞き取り、文書資料を収集することが主であった。交通機関が発達していなかった当時、先生自ら、トラックに分乗し、村の奥地に行ったり、草深い峠の道を上ったりした。学生とともに漁夫の番屋にごこ寝をしたこともある。小柄な先生が鉛筆で小型のスケッチブックに聞き取りの内容を記入している姿が、いまでも目に浮かぶ。ちなみに、当時訪問した牡鹿半島の大部分の漁村は、今回の東日本大震災の津波の犠牲となった。

村の研究者としての先生の業績は、上述の主著のほか、『竹内利美著作集』全3巻の諸論文に示されている。村の研究で先生がとくに注目したのは、村の協同組織であった。先生は東北の村々には性と年齢（家族での地位）による年序階梯集団が存在することを指摘された。これは日本の村の研究での独創的主張である。講組を中心とする西南型とか同族団の東北型などという抽象的類型化を行うことより、まず事実の収集につとめるべきであるというのが先生の力説したところである。先生の存在によって、東北大学の社会学研究は大きく影響を受けた。教育学部だけでなく、理論研究が主であった文学部などの研究者のなかに農村の調査研究を行うものが出てきたのである。田原音和、菅野正、細谷昂の庄内の研究、私のカナダの漁村の調査などは先生の影響の一例である。



竹内利美先生（右）と田辺寿利先生

### 費 孝通

首藤明和（兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授）

中国社会が直面する現実的な問題を調査対象に選び、社会改良の具体的な方策を提示すること——問題意識の規範化を含む中国の「社会と調査」の制度化において、費孝通（1910～2005年）が遺した足跡は大きい。

費の人生は波乱万丈であった。1957年以降の反右派闘争では、反党・反社会主義のレッテルを貼られ、文革終結の76年まで研究の自由が剝奪された。79年の社会学復興後、不死鳥のごとく甦った費はその中心として活動し、80年代の改革・開放の駆動力となった郷鎮企業の振興などを提唱した。とくに社会科学と政策との関連について、事実の記述と分析をとおして政策立案者に建議すること、その提案には社会経済の発展に寄与する方途を含み様々な地域で応用できることなどを重視し、全国の政府・党・教育機関などの講演で繰り返し述べてきた。党は費を中心とした調査組織へ支援を行い、費の思想と行動への求心力が働くなかで中国の「社会と調査」の規範化は進んだ。

そもそも、民国期に主要な学問的訓練を受けた費は、新中国建国後、マルクス主義との折り合いをつけなければならなかった（坂元，2004）。費が大学で学んだ1930年代は、社会学の「中国化」が唱えられ、欧米の社会学理論をとおして中国社会の分析と社会改良の方途が探られた。清華大学ではシロコゴロフから形質人類学の指導を受け、身体的特徴の類型化から人口移動や文化伝播をみる方法を学んだ。36～38年のイギリス留学ではマリノフスキーに機能主義を学び、モノグラフから全体社会を見渡す方法と、価値体系などから自文化を内省的に捉える視点を培った。43～44年のアメリカの旅行では、ベネディクトやミードの文化相対主義に接し、異文化の記述から自文化の特質を読み解く内省的視点を深めた（佐々木，2003）。

費の学問的素地とマルクス主義の折衝は、1980年代に提起された、今日の民族政策を象徴する「中華民族的多元一体構造」（費編著，2008）に典型的である。人口移動や文化伝播から文化を全体的に捉える視点や、少数民族という異文化の記述をとおして中国社会の特性を考える視点、民族の自立と自治には経済的自立が必要だとし、人民公社時代に蔑にされた郷鎮の歴史的な市場圏の重視などが健在である。そして、スターリンの民族定義への反駁による社会主義批判や、自らも加わった50年代の国家による画一的な民族識別工作への反省の一方で、“民族の平等を標榜する社会主義”への支持を鮮明にしている。

この「中華民族的多元一体構造」には「一国社会主義」や「固有の領土」を前提とした同化主義、侵略主義などの批判もあるが、この概念の主眼は移動と相互交渉のなかで共变的に生成してきた民族間の歴史にある。すなわち費は、非対称的な民族関係の是正に向けて実践的に苦慮してきたし、越境的な民族交渉は歴史的常態と捉えている。それゆえ、むしろ私たちが気づくべきは、費はこの概念の説明をとおして、自らも与った「社会と調査」の規範に対して、個人の問題意識がどう乗り越えられるかを示唆したのではないかという逆説である。

（参考文献：佐々木衛，2003，『費孝通』東信堂；坂元ひろ子，2004，『中国民族主義の神話』岩波書店；費孝通編著／西澤治彦ほか共訳，2008，『中華民族的多元一体構造』風響社）。



費孝通の故郷江蘇省吳江付近の水郷